

さいたまここに人あり



若ものを育てたい

全国、海外にも広がる共感の輪

ドキュメンタリー「月あかりの下で」監督 **太田直子** さん

4年にわたり浦和商业高校
定時制に通いつづけて、子ど
もたちが悩み、学び、支えあ
う定時制の教室を撮りつづけ
た太田直子さん。2010年
に完成したドキュメンタリー
「月あかりの下で」（以下「月
あかり」）は、全国で自主上
映を重ねてきました。この間、
韓国での上映など、「月あか
り」が描く子どもたちをとり
まく状況に、国内外で大きな
反応がありました。監督の太
田直子さん（蕨市在住）に、
親として、制作者として、お
話をお聞きしました。

聞き手 田中友里（編集委員）

長男の受験に頭が痛い…

いま、長男が中学3年生で大変なんです。本人は、公立でも私立でも、「大学受験を目指します」という学校には行きたくなくて、文化祭や学校行事を一生懸命やるどころに行きたいって。「大学進学を目的に高校に行くわけではない」という気持ちの子どものなかにもあるんです。県立高校を受ける予定なんですけど、最近、説明会に参加した私立学校の雰囲気がとても気に入って、私立に行きたいって言いだしたんです。本人がどうしても私立に行きたいなら行かせてあげたいけど、そろばんを弾いて考えてみると、かなり難しい。

将来は体育の教員になりたいと言っているので、大学に行かなければいけないし、私立大学に行くかもしれないし、浪人するかもしれない。だから、悩ましいんですよ。

でも、息子の選んだ私立の学校の教育はとても良いと思うんです。生徒の自主性を重んじ、行事もいっぱいあって。受験にこだわらない教養や平和教育にも力を入れている。公立高校に、大学進学率

を売り物にせず人間を育てる教育をします、とうたう学校がもつとあれば、こん

PTAで取り組んだ被災地支援

いま、下の子の小学校のPTAの本部役員も引き受けてます。

実は上の子が小学校1年生のときも選考委員のお母さんに推されて役員になることを決意したんですが、3月の末に会長から電話で断られた経験があるんです。今年はまだ人数がそろったから役員を辞退してください、と。実際はそんなことはなくて、必死に人集めをしていたと後からほかの人に聞いて、PTAの世界ってこんなものなのかな、と思いました。私は委員会でもいろいろと意見を言ったりしていたから、うるさいと思われたいんでしょう。

でも今回は、同学年のお母さんに推されて「最後のご奉公だ」と思って会長を引き受けたんです。やるからにはやっぱり楽しくやりたい。先生たちと手を組んで学校教育を盛り上げていく、そんな組

なに悩むことはないでしょう。私立も公立と同じくらしいの経済的な負担で行ければなおいいですね。ともかく、若者たちがもつと高校生活をエンジョイできる学校を、公立高校で増やしてほしいですね。

織をつくりたいなと思っています。

ただ今年是一年目で、会長の意外な職務の多さに目を白黒させるばかり。何か新しいことに取り組みたくても、「例年通り」の行事や委員会などが多くてなかなか着手できませんでした。そんななか、被災地支援のボランティアグループをPTAのなかにたちあげることができたのは本当によかったと思っています。

今から思うと不思議なんですが、震災後、テレビを見ていてもたつてもいられず、一人の母親に電話をかけたんです。「被災地支援やらない？」と。そうしたら彼女もまさに何かしたいと思っていたところで、トントン拍子に話が進みました。グループの代表は彼女が引き受けてくれ、校長先生の許可を取った上でメンバー募集のお便りを出しました。すると、参加したいというお母さんたちがたくさ

んいて。本当にうれしく、頼もしく思いました。それに、一人ひとり実いろいろな技を持つてるんですね。代表の彼女はジュエリーデザイナーで手作りアクセサリーはお手の物だし、はぎれでシュシユヤコサージュをつくるミシンの達人や、文章が上手でお便りはお任せの人や会計をきっちりやってくれる人、など……。保護者のいろんな才能が生かされて、いい雰囲気で活動しています。

これまで被災地へ送る物資を保護者に



呼びかけて回収したり、手作り品を販売して募金に回したり。とくに、PTA主催の子ども祭での被災地支援は大きかったですね。実は7月に「響」（太鼓集団「響」が石巻の小学校の夏祭で太鼓を叩くというので、ちょうどいい機会だと、撮影を兼ねてついて行っただけです。その時に知り合った漁師さんに連絡を取って、「何か売れませんか」と言ったら、「じゃあ、魚積んで行きます」って言ってくれて。4トントラックで来てくれたんで

「月あかり」から1年……

昨年10月、川口のSKIPシティ国際Dシネマ映画祭で「月あかり」が上映されました。そのときはバリアフリー上映で、すべて字幕と解説（副音声）を付けてくれました。そのなかで、平野先生が怒っているときの、私が聞き取れなかった生徒の言葉を書きおこしてくれていて、驚きました。字幕もとてもみやすく、自分が入れたものよりいいのでは？ と思ってしまいました。ともあれ、これからは、目が見えない人、耳が聞こえない人のためのバリアフリー上映が可能になりましたので、ぜひ活用してほしいで

す。

ビニールプールでいけすを作って、生きた魚を放すと、子どもたちは大喜びですよ。ホタテとサザエをバーベキューコンロで焼き、干物や乾物も売って、大盛況でした。ほかにも手芸品の販売や天然石のネックレスづくりなど、あいにくの雨をもとめせず、祭を盛り上げるのに一役買いました。

ちなみにボランティアグループの名は「さくらプロジェクト」です。

すね。

それから、昨年9月末に韓国でおこなわれたDMZ国際ドキュメンタリー映画祭の国際コンペティション部門にノミネートされて、韓国に行ってきました。平和と共存をテーマにした映画祭で、世界中から集まったドキュメンタリー監督との交流では大いに刺激を受けましたね。忘れられないのはカナダから来た二人のおじさん監督（共同監督作品）の作品「YOU DON'T LIKE THE TRUTH - 4 DAYS INSIDE GUANTANAMO」(LES FILMS ADOBE)。アフガニスタ

ンで捕らえられたカナダ国籍の16歳の少年兵士のドキュメンタリーです。少年は、米兵を殺害した容疑で捕らえられて米軍のグアンタナモ収容所に入れられるんです。カナダ人の調査官が中に入ったときの4日間の尋問中の監視カメラの映像をメインに構成するという異色のドキュメントです。少年はずっと容疑を否認しているんだけど、裁判にもかけられないまま、いまだに塙の中です。彼は第二次世界大戦後、戦争犯罪で有罪となったはじめての少年兵士なのだ、と。その少年、オマル君に対してはアムネスティインターナショナルでも救出のキャンペーンを行ったのですが、私はまったく知りませんでした。けれど、映像をみていて彼のかすかな希望が失われてゆくときの悲痛な叫びが心に残りました。「お母さん」と泣くんです。まだ16歳。うちの息子と同じような年の子どもです。

丁度その頃読んでいた本の中の、1951年から52年にかけて日本でアメリカのCIAがおこした鹿地亘不法監禁事件を思い出しました。スパイになることを強要し、断ると監禁し続け、失望のどん底においやる…。昔から米軍のやり方は変わっていない、と憤りを感じました。

日本でも公開されるといいなと思っ
ます。(www.youdontlikeheruth.com)
実はこの映画をつくった監督のひとり
は、チリのアジエンデ政権のときにテレ
ビ記者として活躍し、政権崩壊後、牢獄
にいれられ、その後カナダに移住したと
いう経歴の持ち主。生きた現代史に出会
った、という感じでこちらは興奮したの

韓国でも共感ひろがった「人育て」

「月あかり」に対する韓国の人の関心
は高かったですね。

韓国は大学進学率が90%で、高校生は
競争社会のなかを生きているんです。そ
のなかで、落ちこぼれていく子も多くて、
引きこもりも自殺も多い。だから、この
映画に「感動した」といつてくれる人が
多かったです。泣けました、という場面
は日本と同じでしたね。

ある高校生は「若ものに関心を持って
くれてありがとうございます」と言っ

ですが、監督はとてもユーモラスで物腰
おだやかな人。人権についてずっとこだ
わりをもち続ける姿勢に心打たれまし
た。もうひとりの監督は毎年、キューバ
に映画を教えに行っているというエネル
ギッシュな人。「こうやって頑張ってい
るひとが世界中にいるんだな」と刺激を
受けました。

くれました。高校の教員をしているとい
う人は、「100年かかっても、こうい
う(競争教育の)制度は変えていかなけ
ればいけない」と感想を書いて渡して
くれました。競争教育のなかで、韓国も「人
を育てる」ということが欠落しているん
だなと感じました。

4月にソウルで上映されることも決ま
りましたし、映画をきっかけに日本と韓
国で若者を育てる教育とは何か、交流で
きたらいいな、と思っ

「月あかり」がつかないだ出会い

昨年は震災の影響で上映会の中止・延
期が相次ぎましたが、それでもおかげさ

まで、あちこちの上映会に足を運ばせて
いただきました。「月あかり」を観て元

気をもらいました、という反応が多いのはうれいすね。こちらとしても頑張っている人たちが全国にたくさんいるんだってことにとっても勇気づけられています。

「月あかり」を観て手紙をくれた人で、横須賀で学童保育をやっている方がいます。どんな学童保育か、一度見に行つたんです。アパートの1階を三部屋借り切つて、普通のお家みたいな場所でした。宿題を強制されないし、おやつはいつも手づくり、本当にアットホームな雰囲気なんです。

なかには、家が居心地が悪いという子もいるそうです。土日は親に合わせて行動するから、疲れきつちゃう。そういう子にとつて、そこは本當にくつろげる場所ですね。先生も「月あかり」に出てくる平野先生みたいに、基本的にどんな子でも受け止めようという覚悟を持つている。優しいんだけどしかなるときはすごく怖い。親に対して、ときには激しくしかったりするけど、交換日記をしたりして、励まし、支えてもいる。

子どもを支えるということは、必然的にその背景にある家庭の状況に踏み込まざるを得ないと思うんですね。踏み込ん

映画「月あかりの下で～ある定時制高校の記憶」

舞台は埼玉県立浦和商业高校定時制のあるクラス。不登校や家庭内暴力、自傷行為など、多くの問題を抱えた生徒たちの入学から卒業、そして卒業後までの4年間の記録です。太田直子監督は、困難ななかで悩み、ぶつかり、支えあう生徒たち一人ひとりに寄り添い、ひとつのドキュメンタリー映画を誕生させました。

〈受賞作品〉

- 平成22年度文化庁映画賞〈文化記録映画優秀賞〉
- 2010年度日本映画ペンクラブ〈文化映画部門第1位〉
- 第35回日本カトリック映画賞
- 2010年第84回キネマ旬報ベスト・テン〈文化映画第2位〉
- 第28回日本映画復興賞〈日本映画復興奨励賞〉
- 第16回平和・協同ジャーナリスト基金賞〈荒井なみ子賞〉
- あいち国際女性映画祭〈愛知県興行協会賞〉

〈上映日程〉

- 2012年1月27日(金)
時間：14：00～／19：00～
料金：前売800円、当日1000円
会場：小平市中央公民館ホール
主催：小平月あかりの会
問い合わせ：042-344-4928(木村さん)
- 2012年2月24日(金)
時間：18：30～(開場18：00)
※平野和弘先生のトークあり！
料金：500円
会場：板橋区立グリーンホール2Fホール
主催：東京都教職員組合板橋支部
問い合わせ：03-3937-2244(組合事務所)

でみると、親にも支えが必要なんです。だから一緒にがんばろう、と子も親も支える。ここがいまの学校にはなかなかできないところだと思うのですが、親子に寄り添って声をかける伴走者の役割を、その小さな学童室が果たしていました。すごいな、と思いました。横須賀の片隅で地道に活動を続けられてきた人がいるということを知つて、とても励みになりました。ぜひまたお訪ねしたいと思っています。

この先、日本は経済的には非常に困難な時代を迎えることになるでしょうね。でもみんなですれずつ喜びも苦しみも分かち合つて、あきらめない心を忘れずにいけば、きつと道はひらく。かなり楽天的ですが、そう思いたいと思っています。そのときに忘れてはならないのは、世代間の連帯や学びあい、支えあい、お互い様の精神。私もこの映画の上映を通じていただいた多くの方とのつながりを大切に、若い親たちに寄り添う中堅の世代として自分自身も若者を育て、育てられながら、また一年、「月あかり」とともに歩いていきたいですね。